

# 日本における父親教育に関する研究の動向

趙 碩<sup>1</sup>  
(2017年1月5日受理)

## Trends in Research on Parental Education of Fathers in Japan

Shuo ZHAO

The purpose of this paper is to make clear trends in research on parental education of fathers in Japan. In this paper, the author examined the following four perspectives. (1) A father in comparison with a mother. (2) A father who influences the child's development. (3) Ego development of a father. (4) Program for a father. According to the results, it can be stated that the concern to program about a father's own growth and training is gradually becoming an issue. It is concluded that further studies, focusing on program for a father and on clarifying the truth of the program are required.

**Key words:** parental education of fathers, training of a father, child care

キーワード：父親教育、父親の学び、子育て

### 1. 問題と目的

現在の日本の社会においては、少子化や核家族化、女性の社会進出など、子育てを取り巻く環境が大きく変化する中、父親の子育て参加とその支援に対する社会的関心が高まっている。最近の内閣府の世論調査(2016)によると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という性別役割分業意識について、「賛成」とする者の割合が40.6%（「賛成」8.8%+「どちらかといえば賛成」31.7%）、「賛成」とする者の割合が54.3%（「どちらかといえば反対」34.8%+「反対」19.5%）となっている。男性のみの意識を見ると、「賛成」が44.7%、「賛成」が49.4%であり、性別役割分業意識を持たない男性が多数派であったことが窺える<sup>1</sup>。また、父親の家事・育児への関わりの実態については、若い世帯を中心に父親の子育て参加が徐々に増えてきた<sup>2</sup>。これらのことから、父親の子育て参加の必要性が言われ続け、父親は意識の上でも実態としても子育て参加が進んできているといえよう。

こうした中で、少子化問題への対策や、「男女雇用機会均等法」（1985年）、「育児休業法」（1992年）、「男女共同参画社会基本法」（1999年）等の男女平等をめざす一連の動きの中で、母親だけでなく父親も子育て

に関わることができるよう施策が進められてきた。母親についていえば、母子関係論等により母子関係の重要性が指摘されたことから、母親による教育が重視されてきた。母親の教育力を向上させるために、母親教育が具体的に展開され、効果をあげてきている<sup>3</sup>。母親教育についての研究も、母親の乳幼児への影響、母親自身の発達変容等の観点から、様々に行われてきている。それに対し、父親教育についての研究はほとんど行われていない<sup>4</sup>。家庭教育は、父親と母親によって担われるが、父親の教育力は重要であるにもかかわらず、父親教育の視点が欠落していたのではないだろうか。父親教育という用語も定着していないのが現状である。

本研究は全体として、母親教育とは異なる父親教育のあり方を明らかにすることを目的としているが、本論ではそのうち、父親教育に関する先行研究を概観することによって、そこから本研究で対象とする父親教育とは何か、導き出すことにする。

### 2. 父親教育に関する先行研究の概観

まず、父親教育に関する先行研究を対象として、どのように研究が展開されているのかを概観する。具体

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期学習開発専攻

的にいうと、「父親」、「子育て」、「育児」をキーワードとしてCiniiで検索し、1978年—2016年における研究論文を収集するとともに、関係する文献、資料を収集した。このうち本論の目的にそって、父親の学びや教育に関係する研究論文、文献、資料を分析対象とした。先行研究は、ジャンルを「母親との対比での父親に関する研究」、「子どもを育てる役割をもつ存在としての父親に関する研究」、「成長する存在としての父親に関する研究」、「父親を対象としたプログラムに関する研究」の4つに大きく分類された<sup>5</sup>。

#### (1) 母親との対比での父親に関する研究

母親との対比での父親に関する研究の中で、父親像のイメージを調査したものについては、高校生や大学生を調査対象としたものが多くなされていた<sup>6</sup>。伊藤(1980)や、米林(1982)に見られるように父親像のみをとりあげたもの<sup>7</sup>、深谷(1990)、桑原・浜島(1991)などに見られるように母親像との比較で父親像をとりあげたもの<sup>8</sup>がある。

父親像は家庭や社会の中でどのように変化したのか、父親像の変遷に関する研究についていえば、窪(1996)や宮坂(1999, 2000, 2008)などの研究をあげることができる<sup>9</sup>。窪(1996)は、奈良・平安時代から大正・昭和初期の父親像の変遷について考察を行った。宮坂(1999, 2000, 2008)は、親イメージの変遷と研究動向、また育児の歴史を検討した。宮坂(2008)によれば、1960年代には非行問題、1970年代には母親の蒸発、育児ノイローゼ型母子心中や子殺し事件、1980年代には家庭内暴力などが大きな社会問題になったが、そのような社会問題を引き起こした原因として「母性」が目された<sup>10</sup>。また、宮坂(1999)によれば、「1980年代には、新・性別役割分業のもとで、『女性も、育児も仕事も』と女性が孤軍奮闘していたのに対し、1990年代には、『男性も女性も、仕事も育児も』と男女の共同育児化に一層の拍車がかかってきた。国際社会を背景にして推進されている『男女共同参画社会』の流れの中での、共同育児のための施策が明確に打ち出されている<sup>11</sup>と指摘されており、1990年代が「父親再発見の時代」<sup>12</sup>だと位置づけられている。

冬木(2008)によれば、父親論は1970年代以降に盛んになるが、その中での議論の中心は家庭における「父親の不在」であった<sup>13</sup>。父親不在がもたらす問題が議論され、父親不在であることによって、母親や子どもに影響を与えるという枠組みで、父親自身の教育力の重要性が問われたのである。家庭における父親不在の影響からスタートした父親研究は、さまざまに進められてきた。それが「父親再発見」であるといえよう。

多賀(2005)は、戦後の父親論の主な2つの言説、「権威としての父親」と「ケアラーとしての父親」についてその内容と歴史的背景について考察した<sup>14</sup>。「権威としての父親」とは、父親と母親の資質の違いを前提とし、しつけや教育において、母親には果たせない役割を父親に求めるタイプの議論である。この言説は1960年代の初期に見られるが、本格的に流布始めたのは1970年代半ば以降である。「ケアラーとしての父親」とは、父親と母親の資質の違いを前提とせず、出産前の準備や乳幼児期の世話を含めて、より広範な子どもへの関与を父親に期待するものである。この言説は1990年前後から広く流布し始めた<sup>15</sup>。この研究から、父親の子育てに対してしつけ・教育と世話という2つの期待があることが示された。船橋(1997)は、父親役割の構造的変化を整理し、父親の役割として①扶養者、②子どもの社会化の担い手、③子どもを世話するものの3点をあげた<sup>16</sup>。これらには、父親の子育てに対する社会的期待が表われた。岡田(2006, 2009)の研究から、男女共同参画社会にふさわしい新しい父親のあり方が重要であることが示唆された<sup>17</sup>。

母親との対比での父親に関する研究をまとめてみると、男性らしさ、女性らしさという性による特性や、男性と女性で異なる役割が期待されることがわかる。母親との比較という点で男女の特性は異なることが示唆され、男女の特性を理解した上で、男女共同参画に即した男女平等の達成が求められるのである。しかし、子どもを育てる際、父親はどのような役割をもつか、父親の教育力そのものを問うことは課題として残りされた。

#### (2) 子どもを育てる役割をもつ存在としての父親に関する研究

子どもを育てる役割をもつ存在としての父親に関する研究は大別して、母親へのサポート者としての父親に関する研究、子どもの教育者としての父親に関する研究に分けられる。母親へのサポート者としての父親に関する研究についていえば、1970年代の「母性強調」<sup>18</sup>とそれともなう母親の育児不安を取り除くことが主として行われてきた<sup>19</sup>。子どもの教育者としての父親に関する研究についていえば、乳幼児の教育における父親の役割が主に対象として行われてきた。ここでは、母親のサポートと子どもの教育の視点から先行研究についてとりあげる。

前述したように、1970年代の「母性強調」とされる時代には、この課題を解決するために、母親をサポートする存在として父親が目された。母親の育児不安を取り除くために父親はどうあるべきかが問われたのである。牧野(1982, 1983)の研究によると、母親自

身の就業形態や家庭外の活動の有無、父親の子育て協力を母親の育児不安の高低との間に関連があること、夫と一緒に子育てをしていると感じている場合に母親は育児不安を低くしていたことが明らかにされた<sup>20</sup>。牧野・中西（1985）によれば、父親の家事育児の分担意識や参加状況を母親自身が好意的に受けとめているかどうか、母親の育児不安と関与している。妻の社会参加・就労に対する夫の実際の理解度にかかわらず、夫の理解の程度に妻が満足している場合には育児不安が低いという結果が得られた<sup>21</sup>。上垣内（1989）は、1歳6ヵ月児をもつ母親400名を対象に調査を行い、父親の育児参加は母親の養育態度との関連性が高く、母親の精神的な支えとなって子どもの発達に間接的な影響を与えると指摘した<sup>22</sup>。また、父親が子育てに関わることが母親の育児不安や育児ストレスの軽減につながるという指摘は、他の研究でもなされている<sup>23</sup>。

その他、数井・無藤・園田（1996）や尾形（2000）が明らかにしたように、夫婦関係が母親のストレスに関連していることが示され、夫婦間のコミュニケーションが多い場合に母親の育児不安が低いことから、良好な夫婦関係は母親の子育てにより影響を与えていることが示唆された<sup>24</sup>。

これらは、母親の育児不安や育児ストレスを軽減しようとするものとして特徴づけられる。これらの研究によって、父親が母親に協力することで、母親の育児不安や育児ストレスが軽減されることが示された。このようなことから、母親の育児不安の解決が議論され、母親への支援が進められてきた。父親の側でも、母親の育児不安や育児ストレスを軽減するようサポートすることに、父親の一つの役割を見つかることができたと考えられる。父親は母親の子育ての補助的存在として位置づけられ、母親をサポートする意味で間接的に子育てに関わっていくことが求められたといえよう。

次に子どもの教育における父親の役割への着目についてとりあげる。1990年代から、心理学においては、子どもの発達に側面から研究が進められた。乳幼児期の子どもの発達における父親の役割が注目され、それにとまって父親を対象とした研究も多く行われるようになった。牧野（1996）によれば、2・3歳児の父親への愛着のパターンや強さの実態を、子どもとその父親をストレンジ・シチュエーションを用いて実験し、観察を行った研究<sup>25</sup>や、父親の意識や行動と3歳児の母子分離、発達に諸側面との関連を実際の父と子を対象として検討した研究<sup>26</sup>などがある<sup>27</sup>。以下に主だった研究をとりあげて、父親による教育として何が注目されたか述べることにする。

まず、父親の子どもの発達への影響を検討した研究

をとりあげる。木田（1981）は、父親の育児参加と子どもの発達に関する調査研究を行い、幼児期における父親の育児参加が子どもの運動・社会・生活習慣・言語能力の各分野の発達に有意な影響を及ぼしていることを指摘した<sup>28</sup>。この木田の研究の11年後の中野（1992）の研究<sup>29</sup>でも同様な傾向が見られている。さらに、中野（1996）は、3歳児の発達を父子関係との関連で分析し、乳幼児期の発達への父親の影響を明らかにした。その結果、発達の高い子は父親とよく遊び、父親とよく遊ぶ子は発達度も高いということが示され、3歳児の発達と父子関係は、父子が相互に規定する関係が深いと結論づけられた<sup>30</sup>。

加藤・石井・牧野・土谷（2002）は、1992—1993年と1997—1998年のデータをコホートとして用いており、それぞれのコホートにおける父親の育児関わりと子どもの社会性の発達との関連について検討した。その結果、3歳児の社会性に関しては、父親の育児関わり要因がどちらのコホートにおいても有意な関連を持つことが明らかとなり、育児への関わりが多い父親を持つ子どもの社会性は、そういう父親を持たない子どもより発達していることが示された<sup>31</sup>。この研究から、父親の子育てへの関わりが、子どもの社会性の発達にプラスの影響を与えることが示されている。

また、吉田ら（1997）は、子どもの発達における父親の役割としては、「①母親を支える役割」、「②母子の共生関係に介入する役割」、「③子どもと関わり母親と違った目で子どもを見守り支える役割」、「④子どもの性役割の発達を助ける役割」をあげた<sup>32</sup>。この研究では、父子関係だけでなく、母親との関係、母子との関係、母親と異なる役割があげられている。母親との関係、母子との関係における父親の役割は、母親をサポートする二次的役割ともいえるが、それに加え、子育てにおける父親独自の役割が指摘されている点は注目に値する。

これらのことは、子どもの発達における父親の役割を示している。父親の子育てに関与は母親の子育てへの補助的役割であったのに対し、父親の子育てへの関与が進むにつれて、父親が母親と対等に子育てに関わり、子育ての主体者として位置づけられていったと考えられる。ここでは、父親の役割は子どもの教育者としての父親の視点から示されている。

### （3）成長する存在としての父親に関する研究

ここでは、成長する存在としての父親に関する研究としてとりあげる。父親が子育ての主体者として位置づけられたことから、子育てによって親となることから、母親と同様、父親においても生じるのか、ということが注目されるようになったと考えられる。

発達心理学領域においては、まず、親の意識の変容や、子育てによる親の変化を検討した研究が見られた。牧野・中原（1990）は、乳幼児から中学生までの子どもをもつ父親と母親 136 組を対象に、子育てに伴う親の意識の形成と変容について面接法による調査を実施した。その結果、親の多くは、子どもを生み育てる体験をする過程で、意識面でかなり大きな影響を受け、変わることで、父親よりも母親に子育てのインパクトが大きいことが明らかになった。子育てを通しての親の変化については、母親は「性格的・精神的影響」、「自分中心的でなくなる」といった人格的な成長と関連したものであるのに対し、父親は「責任感を持つ」であったと報告した<sup>33</sup>。また、牧野・中原（1990）によれば、子育ては親による子どもへの一方的な働きかけではなく、親の学習や人格形成の機能を含んだ親子の相互作用として捉えられる必要があり、親の成長や変化と子どもの成長発達との関係を明らかにする必要性が指摘された<sup>34</sup>。この研究から、親は子どもの成長発達に影響を与えるだけの一方的な関係ではなく、子育てによって親の側も成長発達していくものだという認識の必要性を指摘している。

新谷・村松・牧野（1993）は、子育てによる親の変化を検討するために、幼稚園児から中学生までの子どもをもつ父親と母親を対象に質問紙調査を行った。その結果、子育ては「親から子どもへ」の働きかけだけでなく「子どもから親へ」の働きかけも同時に含む「関係的行為」であること、子育てに関与した親ほど変化していることが明らかになった<sup>35</sup>。また、「子育てに多く関わった父親ほど親としての意識が高まり、人間として成熟したと考えている傾向が見出された」<sup>36</sup>という父親についての指摘は興味深い。牧野ら（1990）や、新谷ら（1993）の研究では、子どもを持ち育てることによる親側の変化をいち早く捉え得る研究であり、その後これらの研究を基に親自身の成長発達を扱った研究が徐々に見られるようになってきた。

親自身の成長発達に関する研究では、柏木・若松（1994）による研究が代表的なものとしてあげられる<sup>37</sup>。柏木・若松（1994）は、就学前幼児をもつ父親と母親 346 組を対象に、親となることによる発達を、「柔軟性」、「自己抑制」、「運命・信仰・伝統の受容」、「視野の広がり」、「生き甲斐・存在感」、「自己の強さ」という 6 つの因子について調査した。この研究によると、この 6 つの因子の全てにおいて母親の方が父親よりも有意に高いこと、子ども・育児に対して父親が肯定的な感情面だけを強くもっているのに対して、母親では肯定面と同時に否定的な感情をあわせもつこと、父親の育児・家事参加度の高さは母親の否定的感情の軽減

につながるとともに父親自身の子どもへの肯定的感情を強めることが示された<sup>38</sup>。親自身の成長発達に関する研究は、その多くが上記したような両親を対象とした研究や父親・母親に関する比較研究である<sup>39</sup>。

一方、森下（2006）や、八幡・島谷（2015）のように父親のみを対象とした研究もある<sup>40</sup>。新谷ら（1993）の研究と類似した結果として、福丸（1997）の研究では、子育て関与と父親自身の発達との関連が認められた<sup>41</sup>。尾形・宮下（1999, 2000）、尾形（2001）の研究でも、父親が子育てに関与することが、父親自身の成長発達を促進させることが報告された<sup>42</sup>。

これら一連の研究から、親自身の成長発達ということが示され、特に父親と母親とでは、親となることについての意識が異なっていることが示された。以上のように、父親独自の成長発達があるとの視点が示された。

#### （４）父親を対象としたプログラムに関する研究

近年では、宮本・藤崎（2008）のように、父親を対象としたソーシャルサポートや子育て支援に関する研究を進めていくことが重要であるという指摘がある<sup>43</sup>。父親には母親とは異なる子育て支援のニーズがあり父親特有の支援が必要であるという見方もある<sup>44</sup>。自治体では、1995 年から父親を対象にした父子手帳が発行され始めた<sup>45</sup>。このように行政においても父親の子育て支援についての取り組みが行われている。ここでは、父親を対象としたプログラムに関する研究をとりあげる。

冬木（2007）は、自治体主催による「父親教室」に着目し、質問紙法および観察法からその実態を明らかにした<sup>46</sup>。冬木（2007）によれば、「父親教室」の効果として、親としての自分のふりかえり、遊びの広がり、新たな子どもの発見という父親の内面変化から示された<sup>47</sup>。田中（2009）によれば、父親は子育てサークルに参加しているうちに、育児が父親同士のコミュニケーションの場となり、自分の育児、家事行動を見直す時間となっていることが示された<sup>48</sup>。上山・松尾（2011）は、父親を主体とした育児の世話技術を習得するための系統的な教育プログラムを開発した。プログラムを受講したことにより、父親の育児分担割合の増加、父親の育児技術の自立が促された<sup>49</sup>。これらの研究の成果から、「父親教室」は、父親の子育て力を高めること、父親の子育てへの参加を促進するという点においても重要な役割を担っていることが示唆される。

父親に対する子育て支援プログラムは、イベント的で補助的な子育ての支援が典型的であると小崎（2009）は指摘した<sup>50</sup>。これに対して、父親に家事、育児の具

体的な内容や手順を示していく取り組みを積極的に位置づけるべきであるという指摘がある<sup>51</sup>。また、小崎・増井（2014）は、少子化対策のプランについての分析を行い、子育てにおける父親支援の変遷の過程を明らかにした。父親支援の変遷は、社会全体の変化に対応すべく社会的な要請により現在に至っていることを報告した<sup>52</sup>。

最近の傾向として、父親の学びに着目した研究が見られる。これに関しては、吉岡（2006, 2009, 2013, 2016）<sup>53</sup>や、趙（2015）<sup>54</sup>の研究をとりあげる。吉岡（2009）は、市民団体「さっぽろ子育てネットワーク」が行う父親講座での学習過程と意識変容を分析した<sup>55</sup>。父親の意識変容には、①学習者である父親と学習を組織し推進する親が共に学び合う形での話し合い学習、②父親、母親のどちらか一方に偏らない構成メンバー、③多様な背景をもった子育て経験者の世代間経験交流、④継続的な子育て学習を積み上げた学習組織者が条件として必要だと指摘された<sup>56</sup>。また、吉岡（2016）は、妊娠5-7か月の初妊婦とその夫を対象に実施されている「両親教室」における父親の学び創りに注目して研究した。その結果、地域の教育主体となる人材としてつながることが、協同循環を生み出す一歩になると吉岡（2016）は指摘した<sup>57</sup>。

趙（2015）は、『親の力』をまなびあう学習プログラム（広島県）の父親教育教材を活用した父親講座における父親の感想から、この講座を通して父親に「親としての学び」が生じていることを指摘した<sup>58</sup>。趙（2015）によって、『親の力』をまなびあう学習プログラム」の父親講座が、父親自身が子育てを通して学び、親としてだけでなく、人間的に成長する父親教育の場となりつつあることが指摘されたのである。

北海道、広島県における父親講座に関する事例には、父親による子育てへの支援の視点とともに、父親自身の学びや人間の成長を重視する考え方が示されている。

### 3. 今後の課題

本論では、父親教育に関する先行研究を概観することによって、研究の動向を明らかにした。その結果、「母親との対比での父親に関する研究」では、父親像の変遷や、母親の性役割に対して父親の性役割の変化を検討することを通して、時代ごとに求められている父親らしさが捉えられていた。「父親再発見の時代」とされる1990年代に入り、父親は扶養だけでなく、社会化や世話といった子育て関与が求められてきたことが明らかにされた。「子どもを育てる役割をもつ存在と

しての父親に関する研究」では、母親へのサポートや子どもへの教育という点で、父親に教育力をつけることが注目されたといえる。ここから、父親による教育の重要性が意識されるようになったといえよう。「成長する存在としての父親に関する研究」では、父親自身の発達にとっての子育ての意味が意識されるようになった。また、父親が親となることへの注目は、父親による教育を具体的に行うことへの着目につながったのではないかと考えられる。「父親を対象としたプログラムに関する研究」では、子育て力を高め、子育てへの参加を促すプログラム、父親自身が人間的に成長することを促すプログラムがあることが示された。父親による子育て支援に関するプログラムを重視するだけでなく、それとともに、父親自身の成長や学びに関するプログラムが問われるべきだといえよう。

以上から、父親教育としてとりあげるべき対象を、父親自身の成長や学びに関するプログラムとし、その内実を具体的に検討することを今後の課題としたい。

### 注および参考文献

- 1 内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」（平成28年度）  
<http://survey.gov-online.go.jp/h28/h28-danjo/index.html>（2016年11月16日取得）。
- 2 国立社会保障・人口問題研究所「全国家庭動向調査」[http://www.ipss.go.jp/site-ad/index\\_Japanese/ps-katei-index.html](http://www.ipss.go.jp/site-ad/index_Japanese/ps-katei-index.html)（2016年11月16日取得）。
- 3 母子関係論等、母子関係の重要性を指摘した先行研究には、次のようなものがある。小嶋謙四郎『乳児期の母子関係』医学書院、1968年。小嶋謙四郎「母子関係論」『調研紀要』36、1979年、1-16頁。
- 4 管見の限りではあるが、CiNiiで「父親教育」に限定して検索した結果、わずかに3本がヒットしただけであった（2016年11月23日取得）。趙碩「広島県における『親の力』をまなびあう学習プログラム」に関する一考察—父親教育教材『お父さんの子育てトーク！』（教材25番）を中心に—『広島大学大学院教育学研究科紀要第一部学習開発関連領域』64、2015年、11-18頁。趙碩「『親の力』をまなびあう学習プログラム」における父親教育教材に関する一考察『中国四国教育学会教育学研究紀要（CD-ROM版）』61、2015年、107-112頁。贅田重雄「父親教育論—親と子の教育権」（特集・教育実践と子どものからだ）『教育』11（5）、1961年、76-83頁。

- 5 これらの先行研究に関しては、内容が重なっているため、厳密に分けることができない。本論では、それぞれのジャンルで特徴的なものをとりあげる。
- 6 今泉信人「大学生の父親像と母親像」『広島大学教育学部紀要 第一部』27、1978年、169-180頁。今泉信人「大学生男子の達成動機とその父親像・母親像との関係」『広島大学教育学部紀要 第一部』32、1983年、197-206頁。今泉信人「大学生の達成動機に及ぼす父親と母親の要求の効果に関する研究」『広島大学教育学部紀要 第一部』38、1989年、225-230頁。山添正「大学生の父親像の研究」『山梨大学教育学部研究報告』32、1981年、121-128頁。山添正「大学生の父親像の研究（Ⅱ）」『山梨大学教育学部研究報告』33、1982年、127-132頁。山添正「大学生の父親像の研究（Ⅲ）」『山梨大学教育学部研究報告』34、1983年、140-146頁。山添正「大学生の父親像の研究（Ⅳ）」『山梨大学教育学部研究報告 第一分冊人文社会科学系』35、1984年、176-182頁。山添正「大学生の父親像の研究（Ⅴ）」『山梨大学教育学部研究報告』36、1985年、87-93頁。石川英夫「父子関係に関する心理学的研究（2）：大学生の父親像について」『東京経済大学人文自然科学論集』1985年、39-92頁。猪野郁子・田中由紀子「両親像について（2）：大学生の捉える父親の現実像と理想像」『島根大学教育学部紀要 人文・社会科学』28、1994年、9-15頁。
- 7 伊藤友宣「子どもにとっての父親像とは」『青少年問題』27（12）、1980年、13-19頁。米林喜男「父親像の変遷」助産婦雑誌 36（11）、1982年、15-19頁。
- 8 深谷和子「子どもの中の父親像・母親像—2人親の時代へ（親子のさずなく特集）」『児童心理』44（12）、1990年、1476-1481頁。桑原和彦・浜島京子「児童の親に対するイメージ—共行動・相互理解との関連—」『福島大学教育実践研究紀要』20、1991年、69-76頁。その他、今泉信人「子どもの認知スタイル（場独立型・場依存型）とその父親像・母親像との関係に関する研究」『広島大学教育学部紀要 第一部』31、1982年、221-229頁。今泉信人・龍祐吉「子どもの達成動機に関連する父親要因と母親要因に関する研究」『広島大学教育学部紀要 第一部』33、1984年、159-169頁。今泉信人・山口修司「子どもの達成動機と父親、母親との日常的相互交渉との関連の検討」『広島大学教育学部紀要 第一部』37、1988年、181-190頁。今泉信人「子どもの達成動機と子どもの達成行動に対する父親と母親の対処行動との関連に関する研究」『広島大学教育学部紀要 第一部』39、1990年、195-202頁。猪野郁子・田中由紀子「両親像について」『島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）』26、1992年、31-37頁。佐々木保行「『母の日』・『父の日』の新聞社社にみる母親・母性像と父親・父性像の研究」『鳴門教育大学研究紀要教育科学編』12、1997年、153-159頁などがとりあげられる。
- 9 窪龍子「父親像の変遷～平安時代から現代～」『子ども家庭福祉情報』12、1996年、8-14頁。宮坂靖子「ジェンダー研究と親イメージの変容」『家族社会学研究』11、1999年、37-47頁。宮坂靖子「親イメージの変遷と親子関係のゆくえ」藤崎宏子編『親と子—交錯するライフコース』ミネルヴァ書房、2000年、19-41頁。宮坂靖子「育児の歴史—父親・母親をめぐる育児戦略—」大和礼子・斧出節子・木脇奈智子編『男の育児・女の育児—家族社会学からのアプローチ—』昭和堂、2008年、25-44頁。その他、石川洋子・大塚明子「父親像の変遷に関する研究—育児雑誌の分析—」『文教大学女子短期大学部研究紀要』41、1997年 79-86頁。黒柳晴夫「21世紀の父親像—父親像の変遷をとらえて展望する」『教育と医学』48（9）、2000年、766-772頁。木脇奈智子「男性の子育て参加を促す要因の検討—文献にみる『新しい父親像』を中心に—」『羽衣学園短期大学研究紀要』36、2000年、53-61頁。井上理絵・富岡美佳「父親像の社会的な変遷—『父の日』を中心とした一考察—」『山陽看護学研究会誌』3（1）、2013年、23-26頁などがある。
- 10 宮坂靖子「育児の歴史—父親・母親をめぐる育児戦略—」、参照。
- 11 宮坂靖子「ジェンダー研究と親イメージの変容」、43頁参照。
- 12 宮坂靖子「親イメージの変遷と親子関係のゆくえ」、参照。
- 13 冬木春子「父親の育児ストレス」大和礼子・斧出節子・木脇奈智子編、『男の育児・女の育児—家族社会学からのアプローチ—』昭和堂、2008年、137-160頁。
- 14 多賀太「性別役割分業が否定される中での父親役割」『フォーラム現代社会学』4、2005年、48-56頁。
- 15 同上。
- 16 船橋恵子「父親役割の3類型—北欧・フランス・日本の父親論からジェンダーの比較社会学へ」比較家族史学会報告、1997年。
- 17 岡田みゆき「教科書に描かれている父親の役割—一家庭科と他の教科に表われた父親の役割の比較を

- 通して一」『北海道教育大学紀要教育科学編』57 (1)、2006年、249-261頁。岡田みゆき「家庭科の学習指導要領および教科書に表わされた父親一文部時報に表わされた父親との比較を通して一」『日本教科教育学会誌』29 (2)、2006年、11-20頁。岡田みゆき「男女共同参画社会における父親の家庭役割—家庭科教科書の分析を通して—」『日本家庭科教育学会誌』52 (1)、2009年、18-34頁。
- 18 久徳重盛『母原病—母親が原因でふえる子どもの異常』教育研究社、1979年。天野正子「新たな子育て文化の創造へ—母親像の変貌のなかで」岡本夏木・高橋恵子・藤永保編集『幼児教育の現在と未来』(講座『幼児の生活と教育』5)岩波書店、1994年、46-49頁。
- 19 母親の育児不安研究としては、牧野(1981、1982、1983、1984、1987、1988)による一連の研究があげられる。牧野カツコ「育児における<不安>について」『家庭教育研究所紀要』2、1981年、41-51頁。牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の生活と<育児不安>」『家庭教育研究所紀要』3、1982年、34-56頁。牧野カツコ「働く母親と育児不安」『家庭教育研究所紀要』4、1983年、67-76頁。牧野カツコ「中学生の子どもをもつ母親の生活と意識」『家庭教育研究所紀要』5、1984年、37-48頁。牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の学習活動への参加と育児不安」『家庭教育研究所紀要』9、1987年、1-13頁。牧野カツコ「<育児不安>の概念とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究所紀要』10、1988年、23-31頁。
- 20 牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の生活と<育児不安>」、牧野カツコ「働く母親と育児不安」、参照。
- 21 牧野カツコ・中西雪夫「乳幼児をもつ母親の育児不安—父親の生活および意識との関連—」『家庭教育研究所紀要』6、1985年、11-24頁。
- 22 上垣内伸子「地域交流と父親の育児参加が1歳6カ月児の発達に及ぼす影響」『お茶の水女子大学人文科学紀要』42、1989年、117-131頁。
- 23 江口麻衣・畷本玲子・緒方美也子・周布亜美佳・田中紘子「育児における父親の母親に対する情緒的支援について」『福岡県立看護専門学校看護研究論文集』24、2001年、121-131頁。岡本絹子・中村裕美子・山口三重子・奥山則子・標美奈子・渡部月子「乳幼児を持つ母親の疲労感と父親の子育て参加に関する研究」『小児保健研究』61 (5)、2002年、692-700頁。本保恭子・八重樫牧子「母親の子育て不安と父親の家事・子育て参加との関連性に関する研究」『川崎医療福祉学会誌』13 (1)、2003年、1-13頁。長瀬由美「母親の育児不安と父親との関連」『家庭教育研究所紀要』28、2006年、24-32頁。高橋桂子・佐野綾香「父親から母親への情緒的サポートが母親の育児不安の緩和に及ぼす影響」『新潟大学教育学部研究紀要人文・社会科学編』2 (2)、2010年、165-170頁。
- 24 数井みゆき・無藤隆・園田菜摘「子どもの発達と母子関係・夫婦関係: 幼児を持つ家族について」『発達心理学研究』7 (1)、1996年、31-40頁。尾形和男「母親の養育行動に及ぼす夫婦関係と母親の精神的ストレスについての検討—共働き家庭と専業主婦家庭の比較—」『群馬社会福祉短期大学研究紀要』4、2000年、97-121頁。
- 25 繁多進「幼児期の父子関係: 2・3歳児の父親へのアタッチメント」『白百合女子大学紀要』23、1987年、93-110頁。
- 26 中野由美子「3歳児の発達と父子関係」『家庭教育研究所紀要』14、1992年、124-129頁。中野由美子「3歳児の母子分離と父子関係」『家庭教育研究所紀要』14、1992年、130-134頁。
- 27 牧野カツコ「父親の現在と父親研究の課題」牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子編『子どもの発達と父親の役割』ミネルヴァ書房、1996年、3-11頁。
- 28 木田淳子「父親の育児参与と幼児の発達に関する調査研究—共働き家族を対象に—」『滋賀大学教育学部紀要人文・社会・教育科学』31、1981年、79-97頁。
- 29 中野由美子「3歳児の発達と父子関係」、参照。
- 30 中野由美子「はじめの3年間の子どもの発達と父子関係」牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子編『子どもの発達と父親の役割』ミネルヴァ書房、1996年、31-45頁。
- 31 加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子「父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響: 社会的背景の異なる2つのコホート比較から」『発達心理学研究』13 (1)、2002年、30-41頁。
- 32 吉田弘道・野尻恵・安藤朗子・小林真理子「育児における父親の役割と父親への援助に関する研究—その1: 子どもの心理的問題と父親の役割との関連性—」『小児保健研究』56 (1)、1997年、20-26頁。
- 33 牧野暢男・中原由里子「子育てにともなう親の意識の形成と変容—調査研究—」『家庭教育研究所紀要』12、1990年、11-19頁。
- 34 同上。
- 35 新谷由里子・村松幹子・牧野暢男「親の変化とそ

- の規定因に関する一研究『家庭教育研究所紀要』15、1993年、129-140頁。
- 36 同上、139頁。
- 37 柏木恵子・若松素子『『親となる』ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み』『発達心理学研究』5(1)、1994年、72-83頁。柏木・若松(1994)以降、彼らが開発した尺度は、日本における親の発達研究において多用されている。例えば、肥後功一「親の発達と子育て意識—父親と母親の比較—」『島根大学教育実践研究』10、1998年、81-92頁。目良秋子「父親と母親の子育てによる人格発達」『発達研究』16、2001年、87-98頁。岡本祐子「育児による親の発達とそれを支える家族要因に関する研究」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部文化教育開発関連領域』50、2002年、333-339頁。佐々木くみ子「親となることによる人格の発達に関する研究」『母性衛生』46(1)、2005年、62-68頁。佐々木くみ子「親の人格の発達に影響を及ぼす諸要因」『母性衛生』46(4)、2006年、580-587頁。また、橋本・奥住(2008)の研究では、この柏木・若松(1994)の研究が、その後の親の発達研究に大きく貢献しており、注目すべきものであると評価された。橋本真規・奥住秀之「障害児を育てる親の発達に関する文献検討」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』59、2008年、243-253頁。
- 38 柏木恵子・若松素子『『親となる』ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み』、参照。
- 39 日隈ふみ子・藤原千恵子・石井京子「親としての発達に関する研究—1歳半児をもつ父親の育児家事行動の観点から—」『日本助産学会誌』12(2)、1999年、56-63頁。高橋道子・高橋真実「親になることによる発達とそれに関わる要因」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』60、2009年、209-218頁。
- 40 森下葉子「父親になることによる発達とそれに関わる要因」『発達心理学研究』17(2)、2006年、182-192頁。八幡朝子・島谷まき子「育児関与による父親の発達—アイデンティティ変容過程に着目して—」『昭和女子大学生活心理研究所紀要』17、2015年、27-36頁。
- 41 福丸由佳「子どもとの関わりと父親の発達：都市部と郡部の地域差の検討」『母子研究』18、1997年、60-68頁。
- 42 尾形和男・宮下一博「父親の協力的関わりと母親のストレス、子どもの社会性発達及び父親の成長」『家族心理学研究』13、1999年、87-102頁。尾形和男・宮下一博「父親と家族—夫婦関係に基づく妻の精神的ストレス、幼児の社会性の発達及び夫自身の成長発達—」『千葉大学教育学部研究紀要1教育科学編』48、2000年、1-14頁。尾形和男『父親の子育てへの関わり』について夫婦間の認知のずれと夫婦関係、家族機能及び父親の変化との関連』『群馬社会福祉短期大学紀要』(5)、2001年、63-87頁。
- 43 宮本知子・藤崎春代「日本における乳幼児期の子どもをもつ父親研究の動向」『昭和女子大学生活心理研究所紀要』11、2009年、57-66頁。
- 44 金山美和子「男性の育児を促進する子育て支援の検討—上田市における実践事例を通して—」『上田女子短期大学紀要』27、2004年、1-9頁。金山美和子「男性の育児を促進する子育て支援の検討(2)—地域子育て支援の利用状況調査から—」『上田女子短期大学紀要』28、2005年、93-100頁。金山美和子「男性の育児を促進する子育て支援の検討(3)—企業における子育て講座の実践事例から—」『上田女子短期大学児童文化研究所所報』、2007年、1-10頁。金山美和子「父親支援の検討—父親の子育ての現状と支援ニーズに関する考察—」『長野県短期大学紀要』62、2008年、63-68頁。
- 45 小崎恭弘「父子手帳の意義とその分類に関する研究」『日本保育学会大会発表論文集』57、2004年、570-571頁。田中和江「自治体が取り組む父親支援—自治体が配布する『父子手帳』を中心に—」『女子栄養大学教育研究室紀要』7、2007年、15-22頁。父子手帳の発行について、小崎によれば、1995年東京都発行の「父親ハンドブック」が、行政のもので最初であると述べた。田中によれば、1995年石川県が最初だった。小崎と田中の研究では、自治体は違ったが、発行年数は一致していた。
- 46 冬木春子「少子化対策における『父親支援策』—自治体による『父親教室』に着目して—」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇)』57、2007年、91-105頁。
- 47 同上。
- 48 田中結花子「父親の子育て意識と子育て支援—父親の子育てサークル参加が家族に与える影響の実態調査からの考察—」『医学と生物学』153(8)、2009年、292-301頁。
- 49 上山直美・松尾博哉「父親の育児参加を高める教育プログラムの実践と評価」『兵庫県母性衛生学会誌』20、2011年、43-46頁。
- 50 小崎恭弘「次世代子育て支援対策推進法に基づく行



動計画における市町村自治体の父親支援—A 県におけるアンケート調査の結果より—『神戸常盤大学紀要』1、2009年、49-59頁。

- 51 大元千種「父親の育児参加とその支援について」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』5、2010年、187-196頁。
- 52 小崎恭弘・増井秀樹「子育てにおける父親支援の移り変わりとその意義—少子化社会におけるプランの変遷—」大阪教育大学家政学研究会『生活文化研究』52、2014年、1-11頁。
- 53 吉岡亜希子「父親の子育てグループ活動における学習過程と意識変容」『社会教育研究』24、2006年、11-23頁。吉岡亜希子「子育て講座における父親の学習過程と意識変容—さっぽろ子育てネットワークの取り組みを事例に—」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』107、2009年、179-193頁。吉岡亜希子「子育てグループ活動における父親の学習過程と意識変容—K 中学オヤジの会を事例に—」『社会教育研究』31、2013年、129-141頁。吉岡亜希子「父親の学びをつくる行政と住民学習

組織の協同—「両親教室」における学習主体と教育主体の循環に注目して—」『社会教育研究』34、2016年、91-100頁。

- 54 趙碩「広島県における『親の力』をまなびあう学習プログラム」に関する一考察—父親教育教材『お父さんの子育てトーク!』（教材25番）を中心に—、趙碩「『親の力』をまなびあう学習プログラム」における父親教育教材に関する一考察」、参照。
- 55 吉岡亜希子「子育て講座における父親の学習過程と意識変容—さっぽろ子育てネットワークの取り組みを事例に—」、参照。
- 56 同上。
- 57 吉岡亜希子「父親の学びをつくる行政と住民学習組織の協同—『両親教室』における学習主体と教育主体の循環に注目して—」、参照。
- 58 趙碩「広島県における『親の力』をまなびあう学習プログラム」に関する一考察—父親教育教材『お父さんの子育てトーク!』（教材25番）を中心に—」、参照。